The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	難民化する先住民、創出される保留地 : 19世紀末～20世紀初頭北米ボーダーランズにおける棄民化された先住民の合衆国包摂
Author(s)	岩崎, 佳孝
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 2017, 51, p. 27-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71390
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

難民化する先住民、創出される保留地

――19世紀末～20世紀初頭北米ボーダーランズにおける棄民化された先住民の合衆国包摂――

岩崎　佳孝

キーワード：先住民／インディアン／アメリカ／カナダ／難民

1　はじめに

アメリカ合衆国の西部、モンタナ（Montana）州のカナダ国境に近い中部に、「ロッキー・ボーイズ・インディアン保留地（Rocky Boy's Indian Reservation）」という先住民[1]指定居住地がある（以下RBI保留地）。1916年に合衆国によって設置された同保留地は、モンタナ州に7個存在する先住民保留地[2]中最後に設置されたものであり、農業を経済の主体とする。

北米大陸にひろく散居する大小の先住民集団クリー（Cree）、チピワ（Chippewa）[3]、アシニボイン、ネズ・パース（Nez Percé、別名ニミプー［Nimipu］）、メイティ（Metis）、ラコタ（Lakota、別名スー）等の先住民集団は、居住、狩猟、採集、交易、交際のための広域生活圏「ボーダーランズ（borderlands）」を自在に往来していた。この領域は、合衆国、カナダ両国から「西部」（合衆国の場合）／「ルパーツランド（Rupert's Land）／北西部準州」（カナダの場合）等と呼ばれたフロンティアの大平原（Great Plains）、すなわち現在の合衆国ノース・ダコタ、サウス・ダコタ、モンタナ、ワイオミング州とカナダのマニトバ、サスカチュワン、アルバータ州に及ぶ広大な地域であった。19世紀にボーダーランズが合衆国＝カナダ国境で分断されることになるまで、これらの先住民集団はいずれの国家にも帰属する意思を有さず、移動を制限されることもなかった。

しかし、19世紀中葉以降の合衆国およびカナダで、ボーダーランズの先

住民集団はいずれかの国家に主権体として統合されていった。その包摂単位となったのが、排他的指定居住地としての「保留地（合衆国ではreservation、カナダではreserve）」であった。[4)]

そのひとつであるRBI保留地は、「チピワ・クリー・トライブ（Chippewa Cree Tribe）」という名称の先住民集団主権地であり、現在そこには3,323名（2010年合衆国センサス）の成員（部族民）が居住している。[5)] しかしながら20世紀初頭の保留地設置直前まで、「チピワ・クリー」という名の先住民集団は存在していなかった。同保留地は実際には、クリーとチピワという二つの小集団（バンド）が、単一の先住民集団を新たに形成したのだ。クリーとチピワはいずれも、ボーダーランズにひろく居住、移動し、大きな人口を有し、特にアシニボインやメイティと血縁や交易を通じ密接な関係を保持していた集団である。[6)]

本稿では現在、合衆国ないしはカナダにおいて先住民集団が国家内にどのような形態で統合されているのかという問題を考えたい。その際、RBI保留地の事例からは一つの重要な命題が浮上する。それは、ボーダーランズにおける先住民集団の実相と、国家への統合時に米加両国が「先住民集団」とみなした実体との間には、大きな齟齬が生じていたのではないかということである。

その真偽を見出すためには、それまでのボーダーランズにおける先住民集団の相互の関係性を理解しなければならない。また、19世紀末から20世紀初頭にかけてボーダーランズに生じた経済変容と政治状況の激変、とりわけ前者としてはバッファロー絶滅、後者としては西部における米加両国の先住民との対立も重要である。その上で、米加両国家が「国内」の先住民集団をどのように規定し、統合しようとしたのかを理解しなければならない。本稿ではこれらを理解した後、ボーダーランズに生きた先住民集団とその後近現代国家に包摂された集団との間にどのような乖離があるのか、そのことがひいては現在の我々にどのような問題を示唆するのか、RBI保留地の事例をもとに考察したい。

同保留地の研究については、スタンパー他およびシェーンが、新聞記事や

関連法令、関係者の証言といった資料と共に、保留地が設置されるまでの歴史を簡便にまとめている。またフーバーは、同保留地における土地利用や所有の実体を、合衆国先住民土地政策との関わりの中で描いた。またバート（1986年）は、後述するようにRBI保留地設立に至る過程で重要な問題として浮上してくる、モンタナの先住民集団が合衆国とカナダのどちらの国家に帰属するのかを巡る当時の議論を取り上げている。しかし保留地の設立過程そのものについては、デューゼンベリー、バート（1987年）、そしてブルーマンの研究が最も詳細なものとして挙げられる。[7)]

後述するように、クリーは当初カナダ先住民としてアメリカ社会から敬遠され国外追放まで行われたにもかかわらず、その後チピワと一括して合衆国に認定され保留地を与えられた。しかし、これら諸研究ではRBI保留地が「オジブワ（チピワ）がクリーに合流し」[8)] 創設されたと指摘するにとどまり、（ブルーマンのみボーダーランズの先住民の実態から考えて二集団の連携が不自然なものではなかったとするが）何故これらの異なる二集団が単一の集団を形成し得たのかについて明示していないように思われる。それはバートがいうように、「説明するのは困難である」[9)] とみなしているかのようである。本稿ではその理由について考察すると共に、やはり従来の研究で充分言及されていない、合衆国が、「カナダの」先住民を含む混成集団にいかなる理由で「アメリカの」先住民保留地を与えることを許したのかについても検討する必要があるだろう。

本稿では以上の点を念頭に置きつつ、19世紀末から20世紀初頭を射程に、先住民集団のボーダーランズにおける生から合衆国先住民主権体RBI保留地の構築に至る過程をみる。そこでは先住民集団側の主体的な動きがどこまで作用したのかという点と、対する合衆国政府にいかなる判断があったのかについての両面から分析を行い、本稿の命題を考察したい。

2　難民化する先住民集団クリー

後にRBI保留地を構成する先住民集団のひとつクリーは、現在のカナダ大西洋岸から五大湖北西部にまでおよぶ地域に起源を発するとされる。クリーを含むボーダーランズの多くの先住民集団の狩猟の獲物で、食料及び交易品として生計の重要な源であったのが、バッファローである。バッファローは18世紀中葉以降次第に減少を続け、その群れは徐々に西部へと移動した。これを追い西に移動したクリーは、1850年代中葉から1870年代にかけて、カナダのマニトバ、サスカチュワン、アルバータから合衆国のノース・ダコタ、モンタナにまで及ぶボーダーランズに散り、狩猟や交易、あるいは血縁関係を有する集団との交際のため広域を縦横に移動する生活形態を送るようになった。特にクリーは馬と銃の交易を積極的に行い、対立する先住民集団に対し優位に立っていた。[10)]

1870年代以降、多くのクリーが特にモンタナに流入した。それには、以下の二つの理由があった。ひとつは、バッファローが60年代にさらに西進し、70年代にその多くがモンタナに生息するようになっていたことである。次に、19世紀後半のカナダの先住民政策に対する叛乱行為の咎により、一部が追討を逃れ合衆国に避難したためである。

1867年の自治領成立後のカナダ政府の先住民政策は、同時期の合衆国のそれと類似していた。「放浪する異端の野蛮人」である先住民集団と条約を締結し土地の割譲を得、そして指定区画である「保留地」に居住させ狩猟や交易を禁じ、キリスト教教育を行い、当面は政府が食料や必要品を供給しつつ、農業や牧畜等による自活に転じさせることを企図した。そこには先住民を矮小化された一定区画内に閉じ込めることで土地を巡る白人との衝突を回避する一方、広大な面積を入植のため解放し得る効用もあった。

多くのクリーはカナダ政府と条約を締結したが、中には従うことを拒否する者も存在し、またこれまで狩猟や交易で確保してきた分に相当する食料を

カナダがしばしば保留地に供給しなかったこともあり、保留地居住を拒否する者も現れた。そして1870年代にカナダ南部でバッファローがほぼ絶滅に瀕すると、食料確保のため最後のバッファローの群れが生息する合衆国モンタナ（1889年に準州から州に昇格）に向かう集団も現れたのである。[11)]

1885年、ルイ・リエル（Louis Riel）に主導されたメイティが、カナダ史上有名な「ノースウェストの抵抗（North-West Resistance）」を起こした。これはカナダ政府の人種主義的かつ迫害的な政策に対するメイティの叛乱とされてきたが、1882年に条約締結を拒否した首長ビッグ・ベア（Big Bear）が統率するバンドを含む2500人のクリーもこれに巻き込まれ、最終的に加担するかたちとなった。[12)]

しかし蜂起はカナダ軍に数か月で鎮圧され、リエルは国家反逆罪で絞首刑になり、ビック・ベアら主だったクリーの指導者も投獄された。追討と迫害を逃れ、多くのメイティはカナダから国境を越え、各地にメイティのコミュニティが形成されていたモンタナに逃亡した。

カナダ内務省下に1880年に創設されたインディアン業務局（Department of Indian Affairs）は「ノースウェストの抵抗」以降対先住民政策を強圧化し、伝統的な儀式を禁じ、子弟に全寮制学校における西欧文明教育を強制した。また先住民集団が集会を開くことを恐れ、保留地を出る際には政府発行旅券（pass）携帯も義務づけた。さらに先住民（集団）を「反抗的（rebel）」「忠誠的（loyal）」の二種に分類するリストを作成し、前者からは条約で約束された権利を剥奪し、後者に前者から没収した毛布、牛、馬を支給した。ビック・ベアの後を継いだ息子リトル・ベア（Little Bear）も、「ノースウェストの抵抗」時にクリーが白人数名を殺害した「フロッグ・レイクの虐殺（Flog Lake Massacre）」に関与したとして、「反抗的」とされ追及を受ける身となった。このため、彼が率いる200名のバンドもメイティと同じく、ボーダーランズにおけるクリーの重要な生活圏のひとつであったモンタナに亡命した。[13)]

しかし合衆国の先住民政策もカナダと同様に、1871年までは条約を、それ以降は合意（agreement）を締結し、従わぬ集団には武力を用い、先住民

集団に大規模な面積の土地を割譲させて西部各地の保留地に居住させつつあった。そして強制的なキリスト教徒化を伴う「文明化」教育を行いながら、保留地に暫時食料、日用品を供給し、いずれは自活するべく農耕や牧畜を始めさせていた。

モンタナに流入したメイティのその後は別稿に譲るとして、[14]本稿では1870年代中葉以降のモンタナにおけるクリーについて追うことにしよう。クリーは現地の白人や、既にそこで保留地に居住しつつあった先住民と衝突するようになった。数少ないバッファローの狩猟では十分な食料の確保もできず、極度の飢餓と貧困状態に陥ったクリーは、食料と賃金を求め6つの保留地や白人の住む各都市を放浪し続けた。クリーは食料の取り分を減らすとして、他の先住民集団から保留地での共住を拒否された。白人住民も、カナダで叛乱を起こした「カナダのインディアン」「イギリスのクリー（British Cree）」を、モンタナを「放浪」する「政治難民」と認識し、クリーを忌避した。またかねてより銃と馬を豊富に所持し戦意旺盛で知られた「叛乱者」クリーは、「スー戦争（Sioux War）」（1876-77）におけるラコタのような合衆国内で武力抵抗を行なう敵対的な先住民集団に合流するのではないかとも懸念された。

当時、ボーダーランズのモンタナ～カナダ北西部は、保留地居住を嫌う多くの先住民集団が、国境を越え逃亡する経路となっていた。例えばスー戦争では、1876年にアームストロング・A・カスター（Armstrong A. Custer）の第7騎兵隊主力を壊滅させたラコタ首長のひとり、シッティング・ブル（Sitting Bull）のバンドが、合衆国軍の追跡を逃れこのルートで77年にカナダに亡命している（81年に合衆国に戻り投降）。またチーフ・ジョゼフ（Chief Joseph）率いる先住民ネズ・パースも、同じ年にやはり合衆国軍の追跡を受けつつ同じくカナダに避難しようとしたが、国境を目前に降伏した。

それ故に入国したクリーは合衆国陸軍から銃と馬全てを没収され、狩猟を行なう術を失い、ますます飢餓状態に陥った。フラットヘッド保留地を監督する担当官の1890年の報告には、銃を持たず半裸で飢えた妻子を連れた「イ

ギリスのクリー」が徒歩で現れ、食料や馬を得るため保留地の畑で賃労働をしているので退去を命じたが、屈強な男たちが涙を流すので気の毒に思い、収穫期まで滞在を許可したとある。しかしこのような同情的扱いは稀な事例で、白人土地投機業者や農民は、クリーに保留地を与えれば自分たちに開放されるべき土地の面積が減るという懸念をもち、敵意を募らせた。この結果、クリーは白人集落から馬や物品を盗み疫病を持ち込むという記事がモンタナの新聞で広く流布され、（準）州政府や首都ワシントンには市民から多くの訴えが送られた。クリーの側も、「野蛮な」慣習として州法で禁止されたサン・ダンス（Sun Dance）という宗教儀礼を公然と行い、白人を一層刺激した。[15)]

1889年にモンタナ州副知事となり、93年から97年まで知事の地位にあったジョン・E・リカーズ（John E. Rickards）は、クリーをカナダに送還するよう陸軍省に圧力をかけた。これに対しカナダ政府は合衆国政府に、1863年に合衆国ミネソタ州で蜂起した後合衆国から追放された1万2千人の先住民ダコタ（Dakota）は、現在マニトバに保留地を与えられ、カナダの先住民集団と同等の扱いを受けていることに注意を促した。またカナダの新聞は、全てのクリーがカナダのインディアンという訳ではないと、合衆国側の主張に対抗する論陣を張った。

しかしカナダ側の抗議は考慮されず、1895年から96年にかけて州内各地でクリーは合衆国陸軍の保護下に置かれ、家畜用貨車に乗せられカナダ国境に追放された。リトル・ベアはカナダがクリーに恩赦を出したと聞き96年に出国に同意したが、入国後「フロッグ・レイクの虐殺」における白人殺害の咎で逮捕された。[16)]

リトル・ベアはその後、「虐殺」目撃者が彼を実行者と確認できなかったため、釈放された。しかし大赦が白紙にされたことは、リトル・ベアを含む多くのクリーに再び国境を越えモンタナに戻らせることになった。その後クリーはモンタナ各地を放浪し続け、白人居住地周縁に宿営して塵あさり、薪割りや洗濯、食肉解体といった低賃金労働に従事した。あるいはサン・ダンスを白人に見せ観覧料を得、荒野に散らばるバッファローの骨を磨いた加工

品やモカシン等の革製品を土産物として鉄道の駅で売り、糊口をしのいだ。犬や死んだ馬を食べるほどの飢餓状態に陥ったクリーは、「厄介者」「汚いクリー（Dirty Cree）」「カナダの乞食」「ホームレス」「土地無し」などと呼ばれ、蔑まれた。[17)]

このように、リトル・ベアは「虐殺」に与した罪科を負わされ、彼が統率するクリーのバンドはカナダは無論のこと、合衆国モンタナでも土地や食料を得ることができずにいた。そのため彼は、クリーと同じく州内を漂流するチピワに合流することを決意したのである。[18)]

3　棄民化された先住民集団チピワへのクリーの融合

RBI保留地を構成するもうひとつの先住民集団はチピワのバンド約100名強であり、ロッキー・ボーイ（Rocky Boy）という首長に率いられていた。同バンドが何処から、そしていつ頃モンタナに居住するようになったのかは判明していない。チピワはもともと五大湖南東部、現在の合衆国ペンシルバニア州にあたる地域に居住していたとされる。しかしその後オハイオ、インディアナ、ウィスコンシンと五大湖南岸に沿って西進し、18世紀中葉には五大湖西方に移動した。その後一部はカナダに、そしてロッキー・ボーイが属する方の集団は、カナダと合衆国国境地帯のレッド・リバー（Red River）／ペンビーナ（Pembina）、タートル・マウンテン（Turtle Mountain）に生活圏を確保したとされる。そして前節で述べたクリーと同様にバッファローを追い、ボーダーランズを狩猟・交易・交際のためひろく移動する生活に移行したのである。[19)]

その後1892年から1904年にかけて、合衆国ノース・ダコタ州で一部のチピワ集団が合衆国政府から先住民集団「タートル・マウンテン・バンド・オブ・チピワ・インディアン（Turtle Mountain Band of Chippewa Indian）」と認定され、「タートル・マウンテン・チピワ保留地（Turtle Mountain Chippewa Reservation）」が設置された。しかしそこでは、チピワと共住し血縁関係を

有するメイティを主体とする集団だけが合衆国から保留地成員として認められ、同じ社会内の多くの「純血者」たちは保留地から放逐された。これらの者たちは多くのチピワ縁者が存在するモンタナに移住し、その首長の名を冠し「リトル・シェル・バンド（Little Shell Band）」と呼ばれるようになった。リトル・シェル・バンドは、タートル・マウンテン・チピワ保留地で成員とみなされなかったため、合衆国には公的に存在しないという意味で「不可視」の、保留地もなく州内を放浪する「土地無しインディアン（landless Indians）」と呼ばれる存在になった。[20)]

同じチピワであるロッキー・ボーイのバンドとリトル・シェル・バンドの関係は分明ではないが、いずれにせよ前者は後者と相前後してモンタナに移動してきたチピワの一バンドであった。ボーダーランズでバッファローが絶滅の危機に瀕する中、ロッキー・ボーイのバンドも極度の貧困と飢餓状態に陥り、白人居住地域の周縁にぼろぼろのテントで宿営し、食肉解体や材木の切り出し、牧場での下働き、あるいはビーズやバッファローの骨で作った工芸品を売り、食料や日用品をかろうじて得た。そして塵あさりをする「人間ハイエナ（human scavengers）」とまで蔑まれながら、州内で漂流し続けた。

1902年、ロッキー・ボーイは合衆国大統領セオドア・ローズベルト（Theodore Roosevelt）に、モンタナ州内に定住地を求める書簡を送った。これはロッキー・ボーイが、モンタナの白人弁護士J・W・ジェームズ（J. W. James）の助言の下で作成したものである。それにより、五大湖西岸の「ウィスコンシン」から移住してきたと自称する110名のチピワのバンドがモンタナ州を流浪しているという認識が、合衆国政府にはじめて得られることになった。ロッキー・ボーイはまた、ジェームズの提言で合衆国上院議員パリス・ギブソン（Paris Gibson）にも接触し、ギブソンに内務省へチピワのための保留地設置の要求を出させるという成果を得た。この時より、RBI保留地設置に至る過程がはじまった。[21)]

当時ロッキー・ボーイのチピワ・バンドの一員であった女性カカクワピーウィスク（Ka-Ka-Qwa-Pee-Wisk）が、年月日不詳ながら保留地創設後に遺

した回想によれば、このバンドはカナダから、あるいは少なくともカナダを経由してモンタナに来着したようである。しかしかような情報は当時の合衆国政府には認識されておらず、その結果クリーとチピワに対する合衆国の対応は大きく異なることになった。チピワは先のロッキー・ボーイの大統領宛書簡に記された、合衆国ウィスコンシンから来た「アメリカのインディアン」であるということになり、クリーのごとく「カナダのインディアン」として国外追放の対象と目されることはなかった。それゆえ、モンタナの新聞各紙で伝えられるチピワの窮状には一部の市民から同情的なまなざしさえ注がれ、これを救済しようとする動きが開始されることになった。[22)]

前節でみたように、モンタナには地域社会の最下層を構成する「カナダの」クリーを蔑視、忌避し、合衆国市民に開放されるべき土地の一部を分け与えることにすら強く反発する、白人一般市民が多数存在した。その一方、同じ境遇にある「アメリカの」チピワの窮状には一転して同情的な目を向ける有力市民は、チピワがかように悲惨な状況にあることは白人にとって不名誉な事態であり、土地を求める白人農民が増えるに従い状況はさらに悪化の一途を辿るであろうから、連邦政府は保留地を設置してこれを保護しなければならないと主張した。そして国政に強力な働きかけを行い、自らも救済のための慈善行為を始めた。

このような白人有力市民の代表的な存在が、先に挙げた弁護士ジェームズと上院議員ギブソン、その後継者で後にモンタナ州知事になったジョゼフ・M・ディクソン（Joseph Dixon）上院議員、モンタナ州ヘレナ市判事ジェームズ・ハント（James Hunt）、州下院議員で著名な文筆家フランク・バード・リンダマン（Frank Bird Linderman）、同州グレート・フォールズ（Great Falls）市の『トリビューン』紙主幹ウィリアム・M・ボール（William M. Bole）と同市郵便局長E・H・クーニー（E. H. Cooney）、そして西部の風景を描き「カウボーイ・アーティスト」として広く知られた画家チャールズ・ラッセル（Charles Russel）であった。これらの者たちの多くは若い頃から、先住民の文化にロマンチシズム的な共感を抱いていたという。

このうちリンダマンとラッセルは個人的親交があり、さらにリンダマンは二十年来のチピワの友人をもち、ロッキー・ボーイ、そしてリトル・ベアとも個人的に交流し、二人に信頼され助言をする立場にあった。彼らは一般市民の先住民への敵対意識を煽る新聞に対抗し、ロッキー・ボーイのバンドを擁護する意見を表明した。また合衆国議員や内務省に電報で緊急の救済要請を何度も送り、市民に呼びかけて募金を集め、自らも資金を提供した。これに応じ自発的に食料、衣料、毛布を支給するなど、救援活動を始める一部市民も現れた。1910年12月の『カマス・プレーリー・クロニクル』紙は、ロッキー・ボーイのバンドに対するヘレナ市民の「手厚いもてなしと気前の良さ」が合衆国政府による食料、衣料供給に十分に勝っていることが先住民にも認識されていると、誇らしげに報じている。[23)]

一方、リトル・ベアのクリーは、20世紀初頭（おそらくは1901年～1908年の間）に、ロッキー・ボーイのバンドに合流したようだ。チピワがこれを受け入れた理由については後段で検討するが、これ以降両バンドの混成集団（以下ロッキー・ボーイ・バンド）は多くの場合「チピワ」と認識されながらも、チピワとクリーの双方を包含する集団としての理解もひろまり、「ロッキー・ボーイとその追従者たち（Rocky Boy and his follower/people）」と呼ばれることも多くなる。[24)]

しかし、それから1916年の保留地設置までの十数年間、モンタナの白人社会の両先住民集団に対する認識には、大きな混乱がみられる。そこではしばしばクリーとチピワが混同され、前者が後者として、あるいはその逆として報道された。例えば、ミズーラ市における1912年10月29日の『デイリー・ミズーリアン』紙では、5人の「チピワ」が飲酒し白人女性に無礼な振舞いをしたため、「その首長」リトル・ベアが今後飲酒や暴力行為を行った者は追放する旨言明したと報じられた。しかしそのわずか一か月後の同紙はこの集団をロッキー・ボーイの「放浪するクリー」のバンドと説明し、さらに翌年には「ロッキー・ボーイのチピワ・インディアン」の首長リトル・ベアが「チピワからの請願」を行なうという混濁した報道がなされている。また同

じ1913年の『カット・バンク・パイオニア・プレス』紙にも「首長リトル・ベアと彼が率いるチピワのバンド」という記載がみられる一方、15年のロッキー・ボーイが余命いくばくもないことを報じる記事に「チピワ」の文字はひとつとしてみあたらず、その後継者がリトル・ベアであるという見通しを伝えると共に、ロッキー・ボーイが「ジプシーのクリー」のバンドを率いているかのような印象を与える記事となっている。[25)]

リトル・ベアは1913年にチピワの首長としての立場で、新聞の取材に対し自分たちの救済を訴えた。

> 我々の子供たちは怠惰ではない。仕事を得たいと願い、その心積もりもできている。しかし仕事が無いのだ……僅かに仕事を得たとしても、白人の敵意を受け、続けることができない。我々はかつて狩猟によって女子供に食料を確保することができた。しかしいまや白人たちは狩猟を禁じ、我々がそれを破った場合には牢屋に入れるのだ（後略）。[26)]

このように、クリーとチピワは共にいまだ飢餓と貧困状態にあった。しかし、社会的弱者が飢餓に陥っていることと、若い世代が合衆国が先住民に期待する生活を志向していることを表明することで、この発言は同情的な白人市民の耳目をそばだてる内容であったろう。

また、クリーの合衆国へ侵入を報じた1883年5月26日付『ベントン・ウィークリー・レコード（Benton Weekly Record）』からロッキー・ボーイ逝去を伝える1916年4月26日の『ハーブ・デイリー・プロモート（Havre Daily Promote）』までの各紙記事をみると、20世紀初頭にチピワと融合して以来、クリーに汚名をきせ社会への脅威を説く扇動記事は（後述するように、いよいよ先住民への土地供与が現実化しようとした時点で白人側に生じた反発による一時期を除き）次第に消え去っていったことも事実である。クリーはロッキー・ボーイ・バンドに包含された一集団としてチピワと一括してとらえられ、白人社会からの敵視より逃れ、外国人として排除されることも免れ得たのである。[27)]

それでは、何故クリーはチピワと合流することができたのだろうか。先に引用したロッキー・ボーイのチピワ・バンドの一員カカクワピーウィスクの回想によれば、この後いよいよ保留地が与えられようという局面で、ロッキー・ボーイは「われわれ（執筆者注:チピワを指す）はイマシース（Imasees、執筆者注：リトル・ベアのクリー名）と保留地を分け合おう」と言ったといわれる。この発言は、ボーダーランズにおける先住民の実態からみて、さほど不自然なものではない。この両集団、そして他の大集団アシニボイン、ネズ・パース、メイティの間には、バッファロー経済に立脚した交易関係は勿論のこと、婚姻を通じ広く張り巡らされ、幾重にも絡み合った血統関係があった。そこでは、たとえチピワという名を共有していても、ロッキー・ボーイのバンドがそうであったように、それぞれが首長を頂き自立した多くの小バンドが自由に行動していた。それらの小バンドはたとえ帰属する集団を異にしようとも、適宜離合集散を繰り返し、狩猟や交易、交際のためボーダーランズでひろく移動を続ける生活を行なっていた。

上記の各先住民集団はこの巨大で、緩やかでありながらも堅固な連合を「ニヒユ・プワ（Nehiyaw Pwat）」[28]と呼んだ。このような関係性はしばしば、異なる名を持つ先住民集団間の境界さえ曖昧にし、明確に分かちがたくした。ゆえに当時の白人社会の大部が既存、既定のものと前提してきた「先住民集団」なるものは、神話、歴史、慣習、言語、地縁等の共有によりアイデンティティと集団名称を同じくする複数の小バンドの総体を指し示すものではあったが、現実には「先住民集団」の境界や規模は分明ではなく、固定されたものでもなかったのだ。[29]

これに加えて、リトル・ベアとロッキー・ボーイの間には個人的な繋がりもあったようだ。二人の妻が姉妹であったという説に加え、ロッキー・ボーイの息子スモールボーイ（Smallboy）が自分の伝記執筆者に語ったことと、デューゼンベリーが紹介するリトル・ベアの息子フォー・ソウルズ（Four Souls）の証言から、両者は少なくとも遠い従兄弟の関係にあったことが判明している。以上のことから、クリーとチピワの関係は白人社会の目に映る

よりはるかに密接なものであったことが知れる。

ロッキー・ボーイ・バンドでは、人数はクリーがチピワの二倍の規模をもち、その一方で外部の目からはロッキー・ボーイがこの複合集団を統率する指導者として映っており、ロッキー・ボーイ自身、自分が優位な立場にあるかのような発言をしたこともある。それでもなお、クリーとチピワの力関係を問うことは難しい。先に述べたように、それぞれが首長に統率された小バンドが離合集散し、ときに他の「先住民集団」とも行動を共にする在り様をもったボーダーランズの「ニヒユ・プワ」的世界では、バンド間に決定的な優劣はなく、話し合いを行いながら行動を共にすることを常とした。このため、リトル・ベアとロッキー・ボーイのバンドに、明らかに一方が主で他方は従であるような関係性はなかったとみなすのが至当であろう。

以上の事実は、二つの集団を統率する両者が縁者であったことも含め、ほとんどの合衆国為政者や白人市民に―おそらくは彼らと親しかったリンダマンのような人物にさえ―認識されていなかったと思われる。そのため、先に述べた数々の報道で、リトル・ベアがチピワの首長であるかのような、あるいは逆にロッキー・ボーイがクリーを率いているかのような混乱と誤解を招いたのであろう。[30)]

しかし少数の記事を除き、20世紀初頭の新聞記事の基調にあり、またモンタナの白人や合衆国政府にひろく共有されるようになった認識は、アメリカ出身のロッキー・ボーイという先住民首長が率いる集団が生存の危機に陥っているという事であった。それゆえに、この窮地にあるアメリカのインディアンに保留地を与えるべきである、ということが合衆国為政者の判断となったのである。そこで次節では、RBI保留地が実際に創設される経緯をみることにしよう。

4　ロッキー・ボーイズ・インディアン保留地の創設と「チピワ・クリー」の誕生

1902年のロッキー・ボーイの大統領宛書簡をうけ、1904年に合衆国上院インディアン問題委員会によって「モンタナ州内で放浪するアメリカ生まれのインディアンであるロッキーボーイ（ママ）のバンドの救済法案（A Bill for the relief of the Wandering American-Born Indians of Rockyboy's Band, Montana）」（傍点執筆者）が上院に提出された。しかし、ロッキー・ボーイのバンドへのフラットヘッド先住民保留地からの土地分与を提言した同法案は、議会で却下された。[31)]

しかしロッキー・ボーイ・バンドがこれを嚆矢に最終的に保留地を確保できるまでの道筋をつけることができたのは、同法案の名称に示されているように、同バンドがアメリカのインディアンであるという認識にあった。時代が少し下るが1916年の合衆国内務省インディアン業務局報告書には、チピワは19世紀中葉頃ウィスコンシンを離れモンタナへと至る西方への移動を開始したと記されている。ここには合衆国当局が、1902年の書簡に記された言説を依然として受け入れていた事実が見いだせる。[32)]

しかし保留地の場所の選定は、困難を極めた。バッファロー狩猟の地ボーダーランズは、今や白人による資本主義的大規模農鉱業、あるいは牧場経営、投機目的の土地へと急速に変容しようとしていたからである。公有地は白人市民や鉄道用地のため開放されるべきと主張する、グレート・ノーザン鉄道会社（Great Northern Railway Company）社長J・J・ヒル（J. J. Hill）が大統領ウィリアム・H・タフト（William H. Taft）や内務省へ強力な政治的圧力をかけ、州内の多くの新聞による「ロッキー・ボーイに率いられた彷徨うカナダの野蛮人の叛乱者クリー」の記事に影響された白人世論の反発もあった。一方、既存保留地からの一部割譲も、そこに居住する先住民集団から拒否された。そのためその後10年以上ロッキー・ボーイ・バンドは州内を放浪し

続け、1915年になっても牛一頭所有せず、僅かに馬を少し持つだけの飢餓状態にあった。[33)]

1908年、ディクソン州上院議員の働きかけにより、インディアン業務局は保留地確保に3万ドルの予算を割り当てた。同年から翌年にかけて、同局調査官フランク・チャーチル（Frank Churchill）がフォート・ペック保留地に打診したが、居住先住民から強硬に拒否された。1909年、ハント判事の要請が功を奏し、内務省は公有地管理局に保留地の土地を確保するよう命じた。翌10年、合衆国はブラックフィート保留地内の未使用地をそれに充てようとしたが、今度はロッキー・ボーイ・バンドの多くがロッキー山脈の麓にある不毛の地を嫌い離散し、この試みも頓挫した。

そこで1912年にチャーチルは、1886年から1906年まで運用されていた合衆国陸軍の砦フォート・アシニボイン（Fort Assiniboine）跡地が、農耕に適していること、白人居住地域から比較的遠隔地にあること等を理由に、この地を候補地に目した。インディアン業務局は13年からロッキー・ボーイ・バンドに同地への居住を許し、1915年に同地を開放する権限を内務長官に与える法も制定された。[34)]しかし、その地に最も距離が近い町ハーバ（Havre）のみ、激しく反発した。市の新聞は「病気や不道徳をまき散らす」「怠け者で叛乱者」である「異教者」を「玄関先」に住まわせ食料を与えることは市に「最も深刻な脅威」となり、また今後の白人市民の入植もためらわせることになると論じた。ハーバは首都ワシントンにも使節を派遣し、予定地は白人に開放すべき良地であり、「暴力的で」「無職の放浪者」である「カナダのクリー」に合衆国が土地を与える義務はないと主張した。興味深いことにこれらの言説は、以前リトル・ベアのクリーに着せられた汚名を再びなぞるものであった。[35)]

しかし今回は、政府からアメリカの先住民と認識されたロッキー・ボーイ・バンドに、かつてのクリーに対するような政治的判断が下されることはなかった。1913年に首都ワシントンを訪問した『トリビューン』紙主幹ボールの嘆願をうけた内務省はロッキー・ボーイ・バンドへの食料供給を約し、

1916年4月に合衆国上院議員ヘンリー・L・マイヤーズ（Henry L. Myers）によって、ロッキー・ボーイのチピワおよび居住地を持たぬ他の先住民に対し旧砦跡地を確保する、1915年修正法が提出された。[36] 法案は議会を通過し、同年9月、大統領ウッドロー・ウィルソン（Woodrow Wilson）の行政命令署名により、旧フォート・アシニボイン南部分に5万6千エーカーの面積を有する、「チピワ・クリー・トライブ」という名称の先住民集団のためのRBI保留地が新設された。しかしハーバの反対を考慮し同市との間には8千880エーカーの公園がおかれ、また保留地は農業に不向きの山寄り部分のみに限定された。農機具と農業指導官が用意され、当面は合衆国政府が食料を支給しつつ、先ずは土地を耕して種を植え、野菜の栽培が始められることになった。

しかし先の『カット・バンク・パイオニア・プレス』紙記事にあったように、前年に余命いくばくもない状態になっていたと思われるロッキー・ボーイは、自身の名を冠した保留地が設立されるのをその目で見ることなく、その数か月前の4月に死去した。彼は最期に義理の息子を介し、ボールとリンダマンらにこれまでの助力に感謝の言葉を述べ、先住民たちには政府から住居と土地を得るため協力し、たゆまぬ努力を続けるよう言い残した。その死後保留地で「チピワ・クリー・トライブ」を率いたのは皮肉なことに、合衆国がアメリカの先住民ではないと蔑視したクリーのリトル・ベアであった。[37]

しかし、保留地設置への道程はこれで終わりではなく、保留地の「チピワ・クリー」成員を確定しなければならなかった。というのは、保留地設置までの間、かねてより両バンドと血縁、交易を通じ関係性を有する「ニヒユ・プワ」の先住民が多数、居住地と食料を求め同地に殺到していたからである。これらの先住民たちも、生活圏、生計の転換を大きく迫られながら保留地を得られず、各地に漂流していたのである。そしてこのような現象はクリーとチピワの合一と同じく、ボーダーランズ社会で折々にみられる様態であり、不自然ではなかった。1909年の合衆国集計によると、ロッキー・ボーイ・バンド内には多くのメイティやアシニボインもがいるだけでなく、比較的縁の薄いブラックフィートやスーまで加わっていることが報告されている。

また保留地成員名簿の作成にあたっては、ロッキー・ボーイとリトル・ベアの間に意見の相違もあった。前者は数を限ることを求め、後者はより多くの者を入れることを主張した。このことは、ロッキー・ボーイよりリトル・ベアの方が「ニヒユ・プワ」の在り様に忠実であったことを示す。以上の理由により、成員画定は困難を極めることになった。[38)]

しかしこの件は、ロッキー・ボーイが死去したことで、リトル・ベアの主張が通ることになった。1917年、ロッキー・ボーイ・バンドは658名の成員名簿をインディアン業務局に提出した。これは基幹を構成するロッキー・ボーイのチピワが当初約100名、リトル・ベアのクリーが約200名であったことを考えると、「ニヒユ・プワ」先住民の流入で人口が二倍以上に増えていたことを示す。その成員構成は依然クリーがチピワに勝り、チピワは人口の三分の一を占めるに過ぎなくなっていた。[39)]

しかし以上の経緯について、これをクリーとチピワの間の保留地の覇権を巡る抗争の結果とみなしてはならない。その証左として、ロッキー・ボーイの死後リトル・ベアが保留地筆頭者となった後も、本来ロッキー・ボーイ統括下にあったチピワは少数派であるにもかかわらず、リトル・ベアの統括下でクリーと共住し続けていることが挙げられる。

合衆国は7月に、申請された658人の名簿から「メイティ」と判断した207名を不適格として除き、451名を成員として認めた。これは、保留地成員を最終的に選定する権限は当の先住民にはなく、あくまで先住民集団を「認定」する合衆国にあったことを示す。そこには、合衆国に統合されるのは「アメリカのインディアン」でなければならないという至上命題があった。合衆国はしばしば白人、とりわけフランス人血統の割合が高く、歴史的にカナダに多くのコミュニティを有する「混血者」のメイティをアメリカ生まれとみなさず、先住民であることにも疑義をもっていたのである。[40)]

これに対して同年10月に保留地の首長たちは、連名でインディアン業務局に書簡を送り、除外者の内46人を成員に加えるよう要請した。この書簡中、首長たちの自集団の呼称が「ロッキー・ボーイ・バンド・オブ・インディアン

ズ・オブ・モンタナ（Rocky Boy Band of Indians in Montana）」や「ロッキー・ボーイ・バンド・オブ・チピワ・インディアン（Rocky Boy Band of Chippewa Indian）」（傍点執筆者）と、外部から付与された名称が混淆し、統一がみられないことは興味深い。[41]かくも自分たちの名称について明確な意識か関心に欠けているように見受けられることは、いかに合衆国から「チピワ・クリー」と規定されようとも、「ロッキー・ボーイのバンド」はなお「ニヒユ・プワ」の世界に生きていたことを示しているといえないだろうか。

しかしこのことと、合衆国政府のみならず地元で先住民と直に接触する多くの白人市民にさえ同集団に冠する名称の混乱があったこととは、全く性質を異にする。白人の場合は、多くの場合先住民集団の実相について人種的偏見や基本的関心の欠如により情報と知見が希薄であったがゆえのことである。加えて合衆国政府には、先住民がアメリカ生まれで、保留地入居に従順に従う存在でありさえすれば、その内実にはさほど関心を抱く必要もなかったのである。

1916年度の内務省インディアン業務局報告書には、ロッキー・ボーイのバンドは嘘をつかず不平も言わず、法を犯すこともないために、モンタナの市民の好感情を得て寄付金を含む援助の手を差し伸べられたとある。また政府からの支給を減らすことができる量の野菜とまぐさを生産することに成功したとも報告され、翌17年度の報告書でもロッキー・ボーイ・インディアンズが保留地内で切り出した木材で家屋、納屋、貯蔵庫を建てたことが記された。同報告書は続けて、先住民に狩猟と放浪の生活を禁じ、保留地で恒久的に自活を目指す機会を与えれば、雑用やモンタナ住民に負担を強いる慈善に頼らず、主体的かつ勤勉にかような成果を達成できるとした。そして、これらのことはいずれ国内の先住民に合衆国市民化への道が開けることを示す好例となるであろうと自賛している。[42]ここで明らかなように、合衆国当局は国内先住民の統治の上で、保留地で定住農耕に従事する集団を望み、それに合致するが故にこの混成先住民集団を「ロッキー・ボーイの」「チピワ・クリー」として容認したといっていい。

しかし、合衆国が先住民に冠した名称と同じく、合衆国の保留地の状況に対する認識においても、それは現実とは乖離していた。先住民はたしかに、インディアン業務局が言うような変容への第一歩を踏み出していた。しかしそこで生産されるものは必要を満たすのには到底足りず、移動を禁じられ不毛地帯に隔離された先住民はその後も窮状に置かれ続けた。そのためリトル・ベアは多くの時間を、モンタナの各都市を回り同情的な白人市民から寄付金を募り、必要物資を購入することに費やさざるを得なかった。彼が1921年に死去した後も、RBI保留地は現在に至るまでさしたる産業もなく、農業を中心に日々の糧をかろうじて満たすに足る生計を営みながらも、政府からの補助金に依拠しながら極度の貧困状態におかれている。[43)]

おわりに

現在の合衆国とカナダでは、先住民集団は基本的に保留地を主権根拠地とする。しかし多くの保留地は都心部から遠い不毛の地に置かれ、政府からの僅かな援助に依存し、産業も農業生産もままならぬゆえの貧困と絶望からもたらされたアルコールやドラッグの中毒、家庭内暴力、犯罪等が蔓延し、社会が崩壊した憂慮すべき悲惨な現況にある。[44)]

本稿では、合衆国でそれまで存在しなかった「チピワ・クリー」という先住民集団が新たに形成され、RBI保留地が創立される事例をみた。そこでは合衆国側の誤解や無知とも相まって、国家統治上理想とされた先住民集団が創出された。合衆国は保留地政策を遂行する上で、先ず当該先住民が両国いずれに属するのか—「アメリカ・インディアン」なのか「カナダ・インディアン」なのか—について判断しようとした。しかしそこには確たる基準もなく、その時々の政治状況や、白人市民の利害が反映された感情的、人種主義的世論に左右された。そこで外国人とみなされた場合、国家から食料や衣服等の救援物資も、居住し生計を営むための保留地も得られず、敵視され国外に追放されるか、飢餓と貧困の悲惨な状態のまま無視され、見えざる存在と

して社会の底辺に打ち捨てられた。

先住民の多くはこの現実を生存のため、共同体や主権の維持のため受け入れる途を選んだ。しかし、かつてボーダーランズで適宜離合集散しながらゆるやかに結束し機能していた自律的社会は崩壊し、民は分断と離散を大規模に蒙った。その影響はあまりにも大きく、21世紀を迎えた今もなお合衆国の保留地の多くで先住民が悲惨な貧困状態におかれる、重大な契機となった。

本稿の事例から明らかになったのは、かつてボーダーランズに在った先住民集団が国家に先住民主権として統合される局面で、合衆国およびカナダがそのために規定した「先住民集団」と、それ以前から在った先住民社会の現実に明らかに重大な齟齬が生じていたということであった。そして、そのことが先住民社会の憂うべき現況を創出したのである。

今後の課題は、合衆国と同じく保留地を拠り所に先住民集団を統合した国家であるという点から、カナダの事例にもまなざしを向けることだろう。カナダでの先住民集団の経験は、合衆国のそれとどのように類似し、あるいはいかに相違しているのだろうか。このことによって、これまでの一国史の枠組みから解放された、より広範な世界史的、比較史的観点からボーダーランズの先住民と西欧植民地国家／近現代連邦国家の歴史的関係性を考察することができるようになるだろう。われわれはそこから得られる歴史的知見を、社会が崩壊し今もなお苦境に置かれている多くの先住民社会と、国家とのより適切な関係再構築のために資するべく、有為に用いることが求められている。

［注］

1） この他、歴史的文脈上必要と思われる際に適宜「インディアン」を用いる。またnation、tribe、band、village、pueblo等の名称で括られる、一定数の先住民が構成する大小各集団については、「部族」ではなく「先住民集団」とし、それらを統括する（一般に「族長（chief）」と呼ばれる）指導者を「首長」とする。

2） RBI以外の保留地とそこに居住する先住民集団（保留地名と異なる場合のみ括弧内に記す）は以下の通り：クロー（Crow）、ノーザン・シャイアン（Northern

Cheyenne)、フォート・ペック（Fort Peck、アシニボイン［Assiniboine］およびスー［Sioux］）、フォート・ベルクナップ（Fort Belknap、アシニボインとグロー・バーント［Gros Ventre］）、ブラックフィート（Blackfeet）、フラットヘッド（Flathead、クートネー［Kootenai］およびサリッシュ［Salish］）。

3） カナダ側ではオジブワ（Ojibwa）と呼称することが多い。

4） 合衆国の保留地（政策）については拙稿 50-51 頁を参照。カナダの保留地については、Frideres 2; Statistics Canada. を参照。

5） 成員数は 6000 人超であるが、その内約半数は保留地外に居住している。McNeel.

6） Burt, “Nowhere Left to Go,” 196; Confederation of American Indians 134-35; Dusenberry 15.

7） Burt, “In a Crooked Piece of Time,” 45-51; Burt, “Nowhere Left to Go,” 195-209; Dusenberry 1-15; Hoover; Shane; Stamper, et.al; Vrooman（特に第 23 章部分）.

8） Albers 657.

9） Burt, “In a Crooked Piece of Time,” 50.

10） ボーダーランズの平原に進出後の同集団はしばしば「平原クリー（Plains Cree）」と呼ばれるが本稿では「クリー」で統一する。Bryan 69; Burt, “In a Crooked Piece of Time,” 45; Vrooman 173.

11） Bryan 69; Burt, “In a Crooked Piece of Time” 45; Burt, “Nowhere Left to Go” 196; Stamper, et.al. 101; Surtees 91.

12） Darnell 4; Paget xiv-xv.

13） Boyden 135; Bryan 69; Paget xv; McCrady 317-18; Sanders 278.

14） 合衆国におけるメイティのコミュニティの帰趨を描いた代表的な研究として Foster, Hogue 等がある。

15） Bryan 69-70; Burt, “In a Crooked Piece of Time,” 45; Dusenberry 4, 6; *Report of Flathead Agency* 124.

16） Burt, “Nowhere Left to Go” 203; “The Cree Indians,”*Coeur D’Alene* (Idaho) *Press*, Dec. 2, 1896, 2; *(Fort Benton) River Press*, Feb 11, 1891, In Burt, “In a Crooked Piece of Time,” 50; *Lethbridge News,* 4; Vrooman 277-78.

17） Botting 212; Bryan 69-70; Dusenberry 4; Shane 6; Vrooman 289.

18） Burt, “In a Crooked Piece of Time,” 50; Burt, “Nowhere Left to Go” 203-204; Dusenberry 10; Nicholas P. Vrooman, interview by author, Helena, MT, Aug 10, 2017; Mandelbaum 107; Shane 6.

19） 西部に進出後の同集団はしばしば「平原チピワ（Plains Chippewa）」と呼ばれるが、本稿では「チピワ」で統一する。Bryan 69; Burt, “Nowhere Left to Go” 203; Vrooman 213, 278.

20）リトル・シェル・バンドは現在も合衆国政府からの認定を求め、法廷闘争を続けている。以上の経緯については拙稿参照。

21）Bryan 69-70; Burt, “In a Crooked Piece of Time,” 50; Burt, “Nowhere Left to Go” 204; Dusenberry 10; Johnson 136; Vrooman 277.

22）Bryan 69-70; Burt, “Nowhere Left to Go” 204; Ka-Ka-Qwa-Pee-Wisk Memoirs in Shane n. p.; Vrooman 290.

23）Burt, “Nowhere Left to Go” 204-206; *Camas* (Cottonwood, Idaho) *Prairie Chronicle,* Dec. 23, 1910, 2; Dusenberry 10-13; Ewers 155; Vrooman, interview by author; Linderman135, 142-43, 207; McNeel; Stamper, et.al. 13.

24）Burt, “In a Crooked Piece of Time,” 50; Burt, “Nowhere Left to Go” 204; Vrooman, interview by author; “Rocky Boy and His Band of Chippewa,” *Cut Bank (Montana) Pioneer Press,* Nov. 19, 1909, In Stamper, et.al 68; “Rocky Boy and His People,” *Great Falls (Montana) Tribune,* Jan. 19, 1913 In Stamper, et.al. 70.

25）Burt, “Nowhere Left to Go” 204; *Cut Bank Pioneer Press,* Aug. 1, 1913, 2 and June 1, 1915, 1; “Indians on a Tear,” *Daily Missoulian (Missoula, Montana)* , Oct 29, 1912, 5; “Rocky Boy’s Band Provided For,” Ibid., Nov. 24, 1912, 4; “Chippewas to Reserve,” Ibid., July 29, 1913, 3; Vrooman 290.

26）*Havre (Montana) Plamdealer.* July 19, 1913. In Stamper, et.al. 75.

27）Burt, “Nowhere Left to Go” 205; Stamper, et.al. 62-78; Vrooman 290.

28）“Cree/Assiniboine”という意味であるが、他の集団もそこに含まれていた。Chartland 6; Ka-Ka-Qwa-Pee-Wisk Memoirs.

29）Ens 65-66; Peers 179.

30）Botting 41; Burt, “Nowhere Left to Go” 203-4; Dusenberry 10; Shane 6; Vrooman, interview by author, Aug 7, 2017; Vrooman 291.

31）Dusenberry 10; U. S. Congress 1-3.

32）Commissioner, to Department of Interior, Office of Indian Office, “Wandering American-born Indian of Rockyboy’s Band.” 10; *ARCIA, 1916,* 53; United States Office of the sub-agent.

33）Burt, “In a Crooked Piece of Time,” 50; Burt, “Nowhere Left to Go” 204-205; *Cut Bank Pioneer Press,* June 1, 1915, 1; Dusenberry 11; McNeel.

34）*Act Authorizing the Secretary of the Interior to survey the land of the abandoned Fort Assiniboine Military Reservation and open the same to settlement,* S.655. Public No.244, 63rd Cong. 3rd Sess. Ch.25.（Feb. 11, 1915）in Shane 21-23.

35）Botting 212; Bryan 70; Burt, “In a Crooked Piece of Time,” 50; Burt, “Nowhere Left to Go” 204-206; Dusenberry 10-13.

36）*Act to amend the Act of February eleventh, nineteen hundred and fifteen (thirty-eighth Statutes at Large, page eight hundred and seven), providing for the opening of the Fort Assiniboine Military Reservation.* S.3646. Public No 261, 64th Cong. 1st Sess. Ch.452. (Sept. 7, 1916) in Shane 24-25.

37）Bryan 70-71; Burt, "Nowhere Left to Go" 207; *Cut Bank Pioneer Press*, June 1, 1915, 1; Dusenberry 14; McNeel.

38）Bryan 70-71; Burt, "In a Crooked Piece of Time," 50; Burt, "Nowhere Left to Go" 207; Dusenberry 12, 15; Hoover 30-31; United States Office of Indian Affairs, "Rocky Boy's Band of Chippewa," *ARCIA, 1915.* 54-55; "Rocky Boy's Band," *ARCIA, 1916,* 54; Vrooman 291, 298.

39）Dusenberry 14; Johnson 44; United States Office of Indian Affairs, "Rocky Boys Indians," *ARCIA, 1917.* 64-65: United States Office of the sub-agent.

40）合衆国のメイティ観については拙稿 56-57 頁参照。Burt, "In a Crooked Piece of Time," 50; Vrooman 301.

41）Stamper, et.al. 101.

42）"Rocky Boy's Band," *ARCIA, 1916,* 53-54; "Rocky Boys Indians," *ARCIA, 1917.* 64-65.

43）Burt, "Nowhere Left to Go" 207; Vrooman, interview by author.

44）Vrooman, interview by author.

［参考文献］

Albers, Patricia C., "Plains Ojibwa," In *Handbook of North American Indians Volume 13, Part 1 of 2: Plains,* edited by Raymond J. DeMallie, 652-60. Washington: Smithsonian Institution, 2001.

Botting, Gary. *Chief Smallboy: In Pursuit of Freedom.* Calgary, Alberta: Fifth House Ltd., 2005.

Boyden, Joseph. *Louis Riel & Gabriel Dumont.* Toronto: Penguin Group (Canada), 2010.

Bryan, William L., Jr. *Montana's Indians: Yesterday and Today,* 2nd. Ed. Helena, Montana: American & World Geographic Publishing, 1996.

Burt, Larry. "Nowhere Left to Go: Montana's Crees, Metis, and Chippewas and the Creation of Rocky Boy's Reservation." *Great Plains Quarterly* 7 (1987): 195-209.

Burt, Larry W. "In a Crooked Piece of Time: The Dilemma of the Montana Cree and the Métis," *Journal of American Culture* 9. 1 (1986): 45-51.

Chartland, Paul L. A. H. "Niw_Hk_M_Kanak ("All My Relationss"): Metis-First Nations

Relations." Research Paper for the National Centre for First Nations Governance, June, 2007.

Confederation of American Indians. *Indian Reservations: A State and Federal Handbook.* Honolulu, Hawaii: University Press of the Pacific, 2000.

Darnell, Regna, "Plains Cree," In *Handbook of North American Indians Volume 13, Part 1 of 2*.

Dusenberry, Verne. "The Rocky Boy Indians." *Montana Magazine of History* 4, no. 1 (1954): 1-15.

Ens, Gerhard J, and Joe Sawchuk, *From New Peoples to New Nations: Aspects of Métis History and Identity from the Eighteenth to Twenty-First Centuries*. Toronto: University of Toronto Press, 2016.

Ewers, John C. *Ethnological Report on the Chippewa Cree Tribe of the Rocky Boy Reservation and the Little Shell Band of Indians,* Indian Claims Commission, no. 221-B.

Foster, Martha Harroun. *We Know Who We Are: Métis Identity in a Montana Community.* Norman: University of Oklahoma Press, 2006.

Frideres, James S. *First Nations People in Canada.* Don Mills, Ontario: Oxford University Press, 2016.

Hogue, Michel. *Metis and the Medicine Line: Creating a Border and Dividing a People.* Regina, Saskatchewan: University of Regina Press, 2015.

Hoover, Brendan Arthur. *Analysis of the Rocky Boy Reservation's Border Formation 1885 to 1950.* master's thesis, University of Montana, 2010.

Johnson. Michael G. *Ojibwa: People of Forests and Prairies.* Richmond Hill: Ontario: Firefly Books, Ltd., 2016.

Linderman, Frank B. *Montana Adventure: The Recollections of Frank B. Linderman*. Lincoln: University of Nebraska Press, 1968.

Mandelbaum, David G. *The Plains Cree: An Ethnographic, Historical, and Comparative Study.* Regina, Saskatchewan: Canadian Plains Research Center, University of Regina, 1979.

McCrady, David. "History of the Canadian Plains Since 1870," In *Handbook of North American Indians Volume 13, Part 1 of 2*.

McNeel, Jack. "10 Things You Should Know About the Chippewa Cree Tribe of Rocky Boy Reservation," *Indian Country Today,* October 13, 2016.

Paget, Amelia M. *Peoples of the Plains.* 1904; Regina, Saskatchewan: Canadian Plains Research Center, University of Regina, 2004.

Peers, Laura. *The Ojibwa of Western Canada, 1780-1870.* Winnipeg: University of

Manitoba Press, 1994.

Report of Flathead Agency, Aug. 14, 1890, http://digitalcollections.lib.washington.edu/cdm/ref/collection/lctext/id/972 (accessed Aug. 18, 2017).

Sanders, Douglas, "Government Indian Agencies in Canada," In *Handbook of North American Indians Volume 4*.

Shane, Ralph M. ed. *A Brief History of the Rocky Boy's Indian Reservation Montana.* 1969.

Stamper, Ed, Hellen Windy Boy, and Ken Morsette. *The History of the Chippewa Cree of Rocky Boy's Indian Reservation.* Box Elder, Montana: Stone Child College, 2008.

Statistics Canada, "Aboriginal Peoples in Canada: First Nations People, Métis and Inuit," http://www12.statcan.gc.ca/nhs-enm/2011/as-sa/99-011-x/99-011-x2011001-eng.cfm (accessed July 27, 2017).

Surtees, Robert J., "Canadian Indian Policies," In *Handbook of North American Indians Volume 4: History of Indian-White Relations,* edited by Wilcomb E. Washburn. Washington: Smithsonian Institution, 1988.

U. S. Congress, Senate, *Wandering American-Born Indians of Rockyboy's Band, Montana,* S. Report, 1020 to Accompany S.2705, 58th Cong., 2nd sess., 1904.

United States Office of Indian Affairs, *Annual Reports of the Commissioner of Indian Affairs for the Year*（以下 *ARCIA*）*, 1915-17.*

United States Office of the sub-agent, Rocky Boy, Montana, "The Tentative Roll of Rocky Boy Indians, May 30, 1917," *Rocky Boy's Agency records 1909-1917.*

Vrooman, Nicholas C. P. *The Whole Country Was....One Robe: The Little Shell Tribe's America*. Helena, Montana: Riverbend Publishing, 2013.

拙稿「漂流する先住民、創出される「インディアン」—19 世紀末北米ボーダーランズにおける先住民の放逐と混血民メイティの先住民化」『アメリカ史研究』第 40 号（2017 年）：46-65 頁。

（日本学術振興会特別研究員）

SUMMARY

Indian as Refugee and the Re-creation of a Domestic Native American Tribe: Chippewa Cree Tribe and Rocky Boy's Indian Reservation

Yoshitaka IWASAKI

It is certain that the tribes of indigenous people in the North American West lived in and moved widely and freely over the North American borderlands, which provided an area for hunting, collecting, trading, and intercourse. In particular, the Cree and Chippewa were bound by a confederacy, the *Nehiyaw Pwat*, whose various bands and people often continued to meet and part as circumstances demanded.

In the late 19th century, after the near extinction of the buffalo and after the 1885 failure of the North-West Resistance in the Canadian West, a band of Cree moved from Canadian soil to Montana, in the US, to chase game or escape the Canadian government. American citizens in Montana hated the Cree, calling them "dirty Canadian refugees" or "rebels" who would bring war and disease to the US territory. They forced them to be the poorest ethnic minority living the margins of mainstream white American society, without reservation, horses, food, clothes, or weapons, and they even deported them to Canada at one time.

Given this, it seems odd that a band of Chippewa, who moved to Montana around the same time the Cree did, was considered a group of American Indians by the federal government while the Cree were not.

In the early 20th century, these "American" Chippewa and "Canadian" Cree were integrated into the US federal system with Indian sovereignty and the official recognition of the US government as a Native American tribe, the Chippewa–Cree, settled at the Rocky Boy's Indian Reservation. Examining this case, we can see how and why indigenous people of the borderlands were integrated into or excluded from the US. We can also see how indigenous groups worked to maintain their existing societies, such as *Nehiyaw Pwat*, in limited parcels called reservations.

Using this information, we can precisely understand the dynamic transformation from indigenous peoples' societies, which functioned well, to the modern indigenous sovereignty within Western federal states.